

「核燃料サイクルの今後の見通しについて」の確認結果

確認項目	第6回幹事会での国（資源エネルギー庁）の説明・見解	
1 核燃料サイクルの意義	<p>◎ 核燃料サイクルは、エネルギーの供給安定性の向上とともに、高レベル放射性廃棄物処分推進の観点から重要である。</p> <p>○ ウラン資源は有限であり、世界的にウラン需要が高まっていることから、再処理によりプルトニウムとウランを取り出し、燃料として利用することにより、ウラン資源を節約する核燃料サイクルは、地下資源に乏しい我が国にとって必要。</p> <p>○ 使用済燃料の再処理により、地層処分が必要な高レベル放射性廃棄物の体積を3分の1から4分の1に低減でき、国土の狭い我が国にとって、処分場の面積が減らせるなど、処分事業の立地選定を進める観点から核燃料サイクルは重要。</p>	
2 核燃料サイクルに対する国の方針と姿勢	<p>◎ 核燃料サイクルは、閣議決定による「原子力政策大綱」に基づき、国の政策として推進しているものであり、その姿勢に揺るぎはない。</p> <p>○ 平成17年10月に原子力政策大綱を閣議決定し、核燃料サイクルの確立を基本方針としている。 使用済燃料の取扱いについて、「全量再処理」「部分再処理」「全量直接処分」「当面貯蔵」の4つの選択肢を比較検討し、再処理路線を選択。</p> <p>○ 新政権においても、内閣総理大臣及び経済産業大臣が、国会において、原子力発電及び核燃料サイクル政策について引き続き着実に推進していく旨明言。</p>	
3 核燃料サイクルの進捗状況	<p>◎ 核燃料サイクルは、当初計画より遅れているが、総力をあげて取り組んでおり、玄海原子力発電所3号機で国内初のプルサーマルが開始されるなど、一步一步前進している。</p> <p>○ 六ヶ所再処理工場の稼働が当初計画より遅れているが、決して後退していない。現在、技術的トラブルの解決に、事業者、メーカー、研究機関が総力をあげて取り組んでいるほか、次に更新する炉の技術開発を国が支援中。</p> <p>○ 九州電力玄海原子力発電所3号機で昨年12月2日に国内で初めてプルサーマルの営業運転を開始。 また、四国電力伊方原子力発電所3号機において、現在行われている定期検査の際にMOX燃料が装荷される見通し。</p> <p>○ プルサーマルに早急に取り組まなければならない理由としては、核燃料サイクルの一つ一つの事業は建設から運転まで時間のかかるものであり、少しずつでも前に進めることが大事。プルサーマルの実施も一定の時間がかかるものであり、今やらなければ、いつまでも進んでいかない。</p>	
4 核燃料サイクルの今後の見通し	<p>◎ 核燃料サイクルは我が国にとって必要であり、構成要素を一つ一つ進め、課題を乗り越えて実現していく。</p> <p>○ 現在、核燃料サイクルの構成要素を一つ一つ進めているところ。</p> <p>○ 再処理工場が試験の最終段階にあるほか、むつ市の使用済燃料中間貯蔵施設が平成22年7月に、また、六ヶ所村のMOX燃料加工工場が平成22年5月にそれぞれ着工の予定。</p> <p>○ 電気事業者は、遅くとも2015年までに、全国の原子力発電所の16～18基でプルサーマル導入を計画。</p> <p>○ 原子力政策大綱では、使用済MOX燃料の再処理を行う第二再処理工場の検討を2010年頃から開始することとしており、国では、来年度からその研究開発の支援を行っていく予定。</p> <p>○ 我が国のおかれているエネルギー環境からすれば原子力発電及び核燃料サイクルは必要であり、国としてしっかり推進する。</p>	